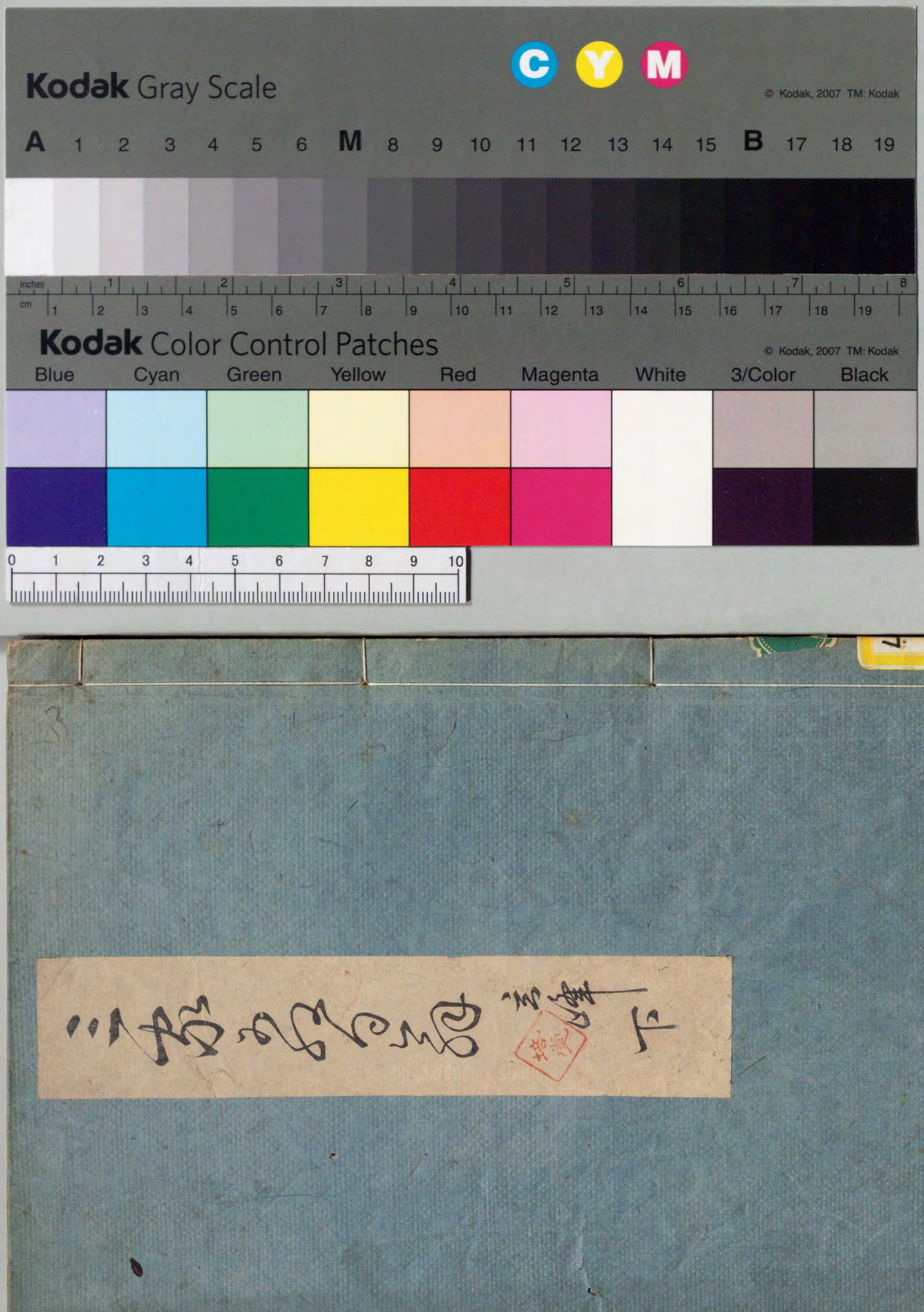
ガラス使用


Kodak Gray Scale
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

天文堂

培蒙

百世せの星霜うつり来りて雨雲の昊然み
ち向仲とちすあり師のよく静なるす
ゑつくなき校定もちいきふ撮解の一つ又
あつうりぬれ共其世の風流ふ
遇ひことくすゝ師授の源をたい
ゑ不およねしく上木の志ゆくせを
さくかちもをさしゝ垂のくと見立ある
業窓業業英謹叙

最評

東京大学

東京大学文学部図書室蔵書之印

ファ1

内記不番子数句撮解をお次今茲雨英
の一伯回忌ゆるに愚何ぞ記し
おもむき草稿を玄蕃集ヨ依て句〻
及ひ事書を沼すに於戯涙とヨ感哉
乃あまつさへ先大の顔藝とハ亦しも

文化三丙寅孟冬

能静廬莊丹謹題

嵐雪發句撮解 共百拾吟

門人 能静莊丹述
　　莱牕莱英校

○春之部

今朝春江奥深もゆるり春をあつ楷を富
北條盛裏紀五房州里見家の事

古歌ハ。親のゝ子のゝ子のゝ子を山賤
乃樗の火げたて飯乞とをる。火げハ
本のまゝなり女人篭雨ちゝ者云く
けたでなるらんたさ言通すと云うゝ
又岡柄の瀧ハ此処ハ不つくき者
ととよ滅らゝせきとゝさハ孫を
あり長をあり出ゝ笠ゝすり
出合てあのらゝせき人とうちとめ
ゆへゝとあり

ゆゝ玉のるも泥障はをしむかハ
李白紫騮馬の詩ハ紫騮行且嘶
雙翻碧玉蹄臨流不肯渡似惜
金泥障白雲關山遠黃雲海戍迷
揮鞭萬里去安得念香閨
○晋王濟乘馬不肯渡水曰馬必惜
連乾泥障去乃渡○杜預曰濟有
馬癖○騮ハくろくまげ
樣ゝの世のゝ泳ゆつゝとやまかせら

正月二日ばかりと観阿弥世阿弥ハ
観世家の祖。吉かつらハ防己井
あをつゞら。うつらハ髪乃作
○宝ふね 祝也ゑ ふ略
須戸の石見ぬ森こゝろや宝舟
田文。ありきさ夜のことの葉ふり乃こな
目さめぬこの夢ふのをとのまくらな。
の森ゝ流ぬ賓と風流とりけ合
と中田歩行ハ須戸の石よかゝる

孤流かくハ名所とハ乙ぬ也
○憶翁ゑ客中
浦ゆく菜をつゝもらんまはくら
菜をつゝもらんハ菜摘水汲師ハ
の云。法華提婆達多品採果汲水
拾薪設食
出代や其門ト淮辰の市
辰の市の社大和社大安寺南祭神
時風秀行ゑ霊せ村の名曰辰市毎

辰巳市をゝく
○なゝ名のこゝ辰巳市とハさハげとも
いさゆゝ人を賣よしもゝ

人丸

當の前とゝきゝんれ小摺津
當前梅の意
むゝ一つゝん一梅ゝかとれ寢さ
はゝ白ゝる集ゝ冬ゝ部ゝ入ゝり
又おもしろきゝ

蕉翁六感の句の一。花やゝ句ゝこと
真角に及ハゝ。各月や雪のゝ上ゝ松
乃新。からびたゝる月嵐雪に及ハゝ
○梅一つゝん一。実句ゝ玄来に
及ハゝ。あゝゝくゝと言へゝとゝ句ゝくゝや
雪の門。かゝうきこと野坡に及ハゝ
○長松ゝ親の名ゝ来ゝ師愛の新
○志ゝゝ句ゝ丈草に及ハゝ。幽
とゝくゝ又傳ゝ。ゝり新の月。れ

りしたゆ支考に及ハ洲。そこ許
ハすゝさうなり峯の松

○菊柄天神奉納

六月を梅雨ゝ雨おもさの淚う那
何ものたハゝ洲とハ志ゝ称とを
りしけるさゆ淚大洲を　西行

○桐の葉うち来りて出ぬ
りくゝの是来ぬ人をこゝ
こちのかとハかりゝといひふくめて

出しまて川の水のもの言消へ
五月雨ゝくもゝぬ洲とに降り来
色さゝれといと名殘おゝくて

梅ゝさゝ紅ゝ梅ゝ梅ゝ梅ゝ梅ゝ梅ゝ梅ゝの
辛支物辣茄（タウカラシ）なゝ。番椒
和漢三才圖繪曰食之有微香能進食云ゝ

○中納言藤房
於馬場殿能馬を付て直諫ゝ奉
死をゝの真云ゝ未ゝ聞

孔雀明王記風の柳をうさすの神子
去年記十三龍馬進奏の事
風閑の西二條大倉の馬場殿にて
被立作〻木造治判官高貞
龍馬とそ月毛二寸斗りなるを
奉進をき〻○万里小路中納言藤房卿
諫む○安信泰親ハ造物又世の孫術数
を習ふ石をしゝの書を指らうとし
称して指乃神子とな 續古事談

○行仰惟皆へ中たくを作
木の枝ふ云ハ〻かくるや風
雲水一所不住意又無門關香嚴
上樹意ヲノツカラアルカ
○蛙合
くゝなるや繻の芥と申く蛙
仙化集蛙合句判ニ○乖の奥
蛙やゝなるすりや 波蛙
○我等今日聞佛音教觀喜踊躍と

濱蒲ゝもりく
嬉しゝの玉佛かとうれ柄抄分
法華化城喩品第七
玉仏蒲八壬生の大玉佛ありへゝ
尺きゝ物花もみちり掃徳この
花ゝの相玉ゝ玉ゝ紅葉すりも
尺たゝゝもの玉やへとあつ
○青精飯
桐柳氏小酒やこのみ菜飯シかな

青精飯場山の井三月の部
事文類聚青月肌飯共に色も寒食
に楊桐の葉を取く飯を染をハ
青くて光色このり色をくへハ陽氣を
たもく道家にハ青精乾石肌といへ
ゝ玉ゝを青飢飯とも云く○ハまやゝハ
精の字の意
○楊川をかくなるれくきを柳の
黒一とかゝへうちかけ色り

勝木する長女いなしやゑ桜

桜ハ岩倉紙波彩浦彩の中を

流る勝木シノ巻ノ心ヲヒザキト云ト

蚊牛ハ信州ノ人其国ニテモ云トカ

タル

○逍遥鵬鷃之間出入是非之境

花の蔭ゝ蝶ゝ間を行るゝ

荘子逍遥遊篇鵬と鷃鷃の事

ゆゝ荘子夢中蝶となるの意

とゝの桃の席や等持院

等持院在洛北衣笠山南麓

源義詮公建立開山夢窓国師

等持院即ち氏公院号ナリ

桃の日や雲ハ美人ノ笑ハ

桃の実集ニ○西の方に桃と桜や

仲の陽翁菓子屋ニ人

歌やもゝの花其角句と共ニ上已

の吟し

汐干れば潟の海苔引おこすらん
　潟虚栗集ニ海苔ヲ仮名ニ作リ
　海好の苔をとりつゝ花さかつと
　炭俵ニハ苔とあり花むしろの意
とゆゆ。津の国天王寺のほとり
の戸田の森とて松の木のふるた
れはたこのもとにたちよりふしまろ
ぶとて寂寞閑居つゝ金松堂を
ておこなひしらはたの

春なれハ色しるしとてまるゝ
つゝしなとを拾ひてむしろやうの
物をふしらへて京たより使ふのき
なとをしりて下略洛西双園禁長泉寺
曳春庵ノ作双園三尺ヘタリ
○兒屋の庵三冬松ハいゆも星かち
よ眠起して嶺を霧七次旭さすす
多新今やと待このゆ曽山乃風ヨ
指ちしきく百里の色れ文よく

と呼ぶ親も親なれとハさぞ思ふらん
其子は母も侍れ親なり
筆とるハ況やかしく況児揚
○右の児よ枕をさせく留とゝまる門人
○大魚。居半。清岩。八重。菊園。
光潮。侍波の一興あり侍れ
すゝしくて出て茶汲の文筆書
文集にんへくもあり
硯やかしきを嘗のさハさそ涼を

気やすけ況小かゝ兒やはゝき母やこ
ひしき其子よの母も侍貝を方墨
億良ラハイマハマカラム子ナクラム
ソノカノ母モ我ヲ待ンソ
花片〳〵轍ゐ河る香のさゝ
片ハひら〳〵
○藤　詞出河り略ス
姑ち浪ゐ藤を浪ゐいこ清
伊良古清之河　書は不ゐ見たる

と書き捨てのりと氏句詞書あり
略をとゝのり文集に見へあり
○墓系
山姥きの実を完拙の詠ひとり
黄泉の意なるべし
○もせ拙翁八蕉化の跡雲子八
隙渉の紙子三十年来八面目
かゝ笠をかゝしこの他のつゝを
出やられし末期に及ぶ半句を

世にいかゝ迷跡を止めさ法無若
夫そしれも高〳〵沢大悲院へ齋喰まれ
中陸廻向
蕉化なりぬ白ひ塗りて花の雲
蕉化八隙渉のまゝ子赤蕉翁を隙渉
よりそらよるるり紙子八臨濟録行
録ゑ師便喝云許多の禿子在于這
裡見什麽椀とこの者八も
椀の誤ゆや盆亦作椀小盂也阪笠

とのれハ盥を盥と書るなり

○同国に若化者ハ於街市搖鈴云

明頭來明頭打暗頭來暗頭打

四方八面來や旋風打虚空來や

連架打　連架ハ穀を打棹なり

○からさほと云　ほのげくうつなり

○同托開云來日大悲院裏ハ有齋

云〻○同往東門遷化太市人競

隨看之云〻至第四日無人隨看獨

出城外自入棺内倩路行人釘之即

時傳布市人競往開棺乃見全身

脫太祇聞空中鈴響隱々而太

○曼之部

大位六位色こき海せよ青簾

源氏系譜の巻よ　見もたゝぬ

四位六位こき交に出入はとと

ゆとき沈　松のき屋具かゝつりん

續猿蓑○簾相ある脇ハ出されぬ

牡丹りあ　風絃

心句をもて解をへし

蟬幔の翠世を草れ戸や置蓮

蘭省花時錦帳下廬山夜雨草

庵中　白氏

もちくれを喰もはてもし　時鳥

源氏紅葉の巻よ　もちくれの香を

なれりしこはとき決ぢちる里

をあつて利休のおもし　完　源氏

時鳥哥や利休のおもし

山科の一貫（チヒロン）南浦文集作觀千の利休を語

一円そこに鶴井（ホトトヒアナ）を加へて利休

と歌を休四く結ぶ志のあら

しくいつ向よ、あつ向きふちのこ

姫ぎゆへあやまてりとその用こ

を称美しありとりて物語を

式席あく晩雪雲きて大きさ

杜宇の句の趣向なり時鳥何と利休のおもひ完たでこの字何やおきたらハよからんをのゝも案しらをよとて其度をたちぬる跡あてなく

○ときぞきゝされハけふもあどおきんくれどおもしやりなゝ沢氣角

其角ゝ方へゆき同ハやとてゆきたらくと詠る其角卒尓としてをもしろハらゝ光雲も鳴やと亜

たらんゝ彼ハ妙くるなれハ今一きゝよ

ゝ沢しゝさ詞もやゝゝむ亜を案を

ゝをのゝも工夫ゝのれとてかへと

たるゝ句ゝん鳴やハ自然なりしは

外交ゝ詞ゝの入りゝ沢とゝ濃光雲

の許みゆき詠るに符節を合せたる

ゝ如ゝされハ未聖ハ蕉門の二ゝ子

とハ称されとて其歸（オモムキ）の一ッなれハ

なりけるを

○撮解

時鳥ゆゝハ庭頭の根付の那
梅度の笛なり
川貫や樓より洞めるる夜半樂　夜半樂ハ樂ノ名
川貫の花橘より似たり
○義仲寺師父之廟
色ともなりりる汁吉哉
さひしさハそのもとともなりり
りも槙さ月ふ秋ハ夕ぐれ　寂蓮

義禁姫く風やたこれ剃（キサミ）よし
青丹すゝ京ふ良の詞の作ゝ
○門外の神鉾絵りて牧後の宮
れ奥ふらく八十漸をわらぬ磨外
人里の山法すく表の東に合殿（ミナラカ）
彼と寄せとしをかさ〇く東の面
らしゝせけなるにいとかさひ
わゝゝせ法ゝ
神酒せハかつかもすめるを山の奥

鑑木の意

○熊野

蕨叔たく爰くもお信恵あらと
蕨ごりハ鑑ゑをけつて蕨つめゐる
ゝとの古伝の名意又蕨叔の神ゆ
と云ひり。六祖ノ雄を踏ゝる意ゑ
筆中兒の銀(ハンガキ)のうはゝ
源氏横笛の巻ゆ蕨大将ゑ蕨乃おひ
出るゝひあてんとてたりこゝをゆ

つとゆきゝもちてちづくもよゝと
くひぬらゝ玉へハトアリ

○善光寺ゑ海松喰ゆる尾か
海松ゝゆ加ゝ玉とてゝしも寺ゑ尾
くゆゝち祢の加ゝ玉とてゝしも
うバ玉の玉の玉ゑ玉ゑゆてもゆ
ゆゝゝゝ

遍照

○和泉式部ゝ石塔　本宮ゝ一里

彼式部の月乃さハりと詠ゝ

和とゝ
蛸のさゝ蹟あり〳〵ちつり支
。あさゆーのまゝひの雲のくれや
らて月のさゝりとなるをかれしき
和泉式部

。神の返し
もとよりもちりあゆーる神かれハ
月のさゝりの何ゝくりしを
其ゝ八舊跡城墓ゝ意

白角や角ゝ月ゝとゝ掘牛
掘るゝ角ゝ角ゝ人ゝし墓ゝ人ゝ詞端牛
のさゝ海墓石のゝくゝ白家ハ墓ゝ材
○ゝる歌容
○大津の駅ゝ
あちさゝをゝ墓ゝ盛ハや神枕
○萬葉集。家ゝ
神枕張ゝ
一刀ゝ

○撮角

本綱菖蒲冬至後五十日菖始生ゝ其根
一寸九節者良

○若根を帝を出ものを菖根と帝をとる
序是ハ若ゝ敢くかゝぶとの形
然聖謨卑人敢の敢容

○粽一ふさ金阿神のまもり
祈ふかくふきもるに
粽を刑和ハ現の草むを死
金阿を書所行狗の連るゝと

左傳宣公十五年晋魏顆武子之子初
武子有嬖妾無子武子疾命顆曰必嫁
是疾病則曰必以為殉及卒顆嫁之曰疾
病則乱吾從其治也ゝ及敗秦師于輔
氏獲杜回秦之力人也顆見老人結草以
亢杜回躓而顛故獲之夜夢之曰余而所
嫁婦人之父也爾用先人之治命余是以
報ス

櫻佩くわさとをんかしらや芝青

芝青武別芝浦の邑し

○又日樵茅ふをあびしもの〳〵

夫氣を毎てるの澄類本草よると

拾芥抄よ毛つる枕草るかとい〳〵

○拔劍逐蠅

蠅〳〵ちき怒る心よる東方

魏畧思性急嘗執筆作書蠅集筆端

驅去復來如是再三思恚怒自起逐蠅

不能得還耽筆擲地蹋壞之。魏志不

見怒蠅排顔圖機活法等よ載を

○蒙求よ　王思　怒蠅とい

○ゑつ〳〵やゑ庵の蚊詩人を喰ふく

桃のとし〳〵孤〳〵やか〳〵の蚊美人

の帳すこゞれ〳〵瘦〳〵柳よ似たり

かゝ蚊の蚊ノ〳〵

庵の蚊や孤よ枯〳〵る藻塩艸

し句ハ庵紙よ蚊を濂入〳〵る詞云ひり

宿機不持の唐紙よ蚊を濂入〳〵る

○拙角

ひろと雇機八詩人江戸本町服業肆
中巷田又雇巷巷田と云肆の望に雇
を画く閑て写を三軒並べしのをハ
中巷田と云

○旅意

萍の実もいきれすー水驛

家語致思篇ニ楚昭王渡江江中有物
大如斗圓而赤直觸王舟舟人取之王惟
問群臣莫能識使使聘魯問孔子孔子曰

此萍實也可剖食之吉祥也惟霸者為
能獲焉云々

○紀のふ戎れ浦海ゆり江ニ入り
馬巷乃あを沼く実物を志るせる
海外ニ表のあり。ルスン。カボチヤ
かとりを津海根の人々を画ニ
ゆ三ん々り日本ニ南ニ西ひ巷の
洞ゆかをれいはゆ走るを鬼ゆもせよ
人ゆもせ志海れ海ゆ旅寝し

蛇いちこゝ丶ゆ引抜く丈婦つも

益八舞の臣下。山海經ゑ異物を志るも

。ゆ引抜し丈婦ハ雲丈の器の形容蛇

いちこのあやしき名ゑ是合をの作

○維盛卿詠 中津川近き湯のゝハの

ほとりく塩田百ゑ十石代かを丈

くたりをれと丈ゝ今も平あし

川畳の毒一時もさ消ゑとゑ

維盛卿詠 吉野みのゝ

。頼政の編みさ消ゑとゑ平家ハ

ときをめくらさ沈とあり

○茱萸

山茱萸のかさしやゝ重丈ふし花

續齊諧記汝南桓景隨費長房長房

謂之曰九月九日汝家當有災厄急宜令

家人各作絳囊盛茱萸以繫臂登

高山飲菊酒此禍可消云〻

○八幡太郎賛 河堂関白殿れ拾忌ゑ

義家朝臣奥羽の時南部より
早瓜（ワサウリ）をおくりたてまつるとて博士（ハカセ）
毒なるやうにて作る瓜を
割りたるに毒多則出下略

瓜切くさいぬ飯の光てこの那

古今著聞集に御堂関白殿に初瓜
の解脱を信正訳修法場所時の醫師の名
武士義家朝臣奥羽にて侍りしに八月
一日白粥をすゝめ早瓜をまゐらせしに
此粥忌れ中は和入〳〵とゑんすいなる
べきとて時明かう〳〵なかせられぬ
時明うゝなるひく一川の瓜は毒多
きゆゑとて二ほとり出しうり
かゝ持やれば毒多瓜を食べしやれ
で信正は作るかゝ持せらるゝを忘し
念誦の員とのうちとらるゝうざきり
を時方面に毒多治をべきうゝ作を
バ瓜をゑまハしゝ見て二れは計を立

てぎりを後藤にてこしらへ来りをり
義経は後藤にせつきとられバ獨刀
をぬきてかりゐれバ中小蛇ひらゆり
てゐをり計り蛇の右右の眼ヲ三ツ
きり義経何とおもく中をわるとうへ
はをたゝ蛇の頭を切しゝをり名
をゝゝゝ人ゝの姫ゝひかくの
ゝゝゝゝかりをるゝし

國史實録 写本七十九 武士頼光

は作ゝり兵源義経は作ゝ八郎なりと
ゝり左手代御ゝ
○伏見稲木町 姫松ゝゝ
行ゝ実は後ゝの古風なゝ
川焼く来る夜遊ゝ夜ゝり
遊所なり
○頭しゝれ
嘗の毒を入あやしゝ二ッボし
三光の気なりゝん七夕の二ッ星ゝ

○掛角

七夕の句多くしる

土蜘くはゐ嵩(カム)奥が牡丹うゑ

大海の地ゐたる唐土をおもはるゝ

もかりしハ和るの意

○六本木よりく

下雷や地出なりくの蟬の幸

六本木ハ江戸麻布

○那智山

暑雲の外瀑布ゐる集る人の色

一声山鳥曙雲収萬點水螢秋艸中　許渾

和漢朗詠集注ニ曙雲也　山鳥ハ子規なり

○蕎沢を出られの門ハ木立根を

ゑを接ありくゑ尺くらゐ高くた

右ゑ元木ゑ高く肥く

木樵もつとて蜘蛛の糸をもて鼻

ゑかへたるさくゑ遠出たる西行

のもとり松とやゝ伸ゝ紙衣松葉

のうしろが酒屋のきこへ伝ふ所
しゝ次
壹アにあつきこゝちする松の陰
西行ものもり小奥州松島のゆゝ
義經記等七魚いとゝ下れ西の方
よあるこのの里うりとこえ称あり
乃松はつき清よしとゝ句意ハ
毎慶壹三扇とゝスルの家宅ノ
能ノ間の牡丹ミアリト

○一種賞玩かゝて皆ゆく中にきゝ
ハり作りく
味噌すにすゝに紙の溶うる
一に搗碎とあり也　鱗　和漢三才圖繪
○黄頷魚　ゴリ　又カジカ
○祇園の會は七日の詳ナ写るの山後
ゝと称すもえんもの八坂社いう社
し松尾まゝ赤袍ゝ太刀ゝきて
四条ゝ会の迹ゝ床几を居きて下れ

雑式おなじ色そ紅の紙さけもち
鉄棒らいこみかちんの上下巻もち男
笛五節乃棒てにより拍く粽をたく
乃此巻をいてゝむ巻く宮めつれ
れゝ一三の風を改めて以威儀嚴
重なる中まはすこと印と車は横
ゝ町とこゝ何の国か作りきん
もて印を出もまは踊や神宮の會
菓子(カチン)褶色　陸佃云　黄黑色

立(チ)印に蒜を巻とれ人ゆゝとゝ八肥満の
人の形をゝ作りまをハし
○序今沼洲ちゝ作りて京すゝ
大和詠りけ和歌の左もゝ
と出立けるを添れ〳〵〳〵て
仲京川の岱の清水ゝ先ゝ進め
序今ハ江戸日本橋西河岸石ゝ
四京高と船を以其比序今琴風
とて一雙の俳人ゝ進めハ涼めゝん

○撮解

○紀伊路中清水　摂州ニ同名ヲ

すゝゝ○く道さもりか山清水

世を捨く山ハ人人山さくも殺ゝき

時をいづちはらん

○題

すゞ掛し清水羽黒のきゞに蔓尾花

墨黒ハ焼くすきの末黒さなり

○秋之部

秋風の心うこきぬ縄簾

○この簾夕ゝ捲かけくふく風

月秋の心そうこきをめぬる　後深院

○防鶴河使

蓊蔚や人目はくみの河はらひ

鶴ハ天の川ヲ合せる意

○塔ノ沢ノ紀宗祇く廟　石碑し

石塔ヒなてくを俤ひ一茎うゝ

箱根湯本にて

滝花のけうとう浮ばや星使

和州吉野にて

作意

夜波もうえや隅田川京の橋柱

えやハつふきのさ雲くさのえや

なるべしいまへ橋ゆうと云夜波

星ハ七夕なり

○寺ふく

夢幻や雲のうくこのあきりす

詩國風七月篇ニ十月蟋蟀入我牀下

○十歳ニ成りる子の分よりりるよ

駒仮れもの事やまの雪

○まの雪もしの去ばくや世中

のおくをさきくあ川ひるらひ

定家

弱仮八重の連と菊と菊をとる

月尾をなを天とひをなり

味噌ゝ煮て食とハ赤〻し雞頭也
白雞頭花味醤に莫食ハ治腹中ヲ
と本綱ゆえ
○鶏の花
おとし〻ゝく富士よもちかゝ花ぞうる
一ゝ横たゝ〻ゝとなり
雞頭を蜜のたきさに煙かゝ
蜜の姪さし香の名
○朝皮一周忌

青ふくゝ色ひとり廻ゝく一周忌
詠ゝあきの句作ゝ夢の意なり
霊棚孔栗すきはいの字かな
○山はたゝはゝくもあゝのいの字
艸栗ハ蕎ともハ雑ゝらん
武紀
いはとの武紀やらむいの字艸ハ
粮尾艸栗に似たる草なり
○あこのゝやゝ夫法やとゆへ〻ゝ云ゝ

夢かゝ似るゝ夏汁養と云り
菖蒲屋半七戒名嵐雪と義法や
三勝とゆふ女とやゝもすれば自害せ
しとゝやり

○蘭鮑同肆

蘭鮑ゝゝの臭やもし食の養の下

家語六本篇與善人居如入芝蘭
之室久而不聞其香即與之化矣與
不善人居如入鮑魚之肆久而不聞其
臭亦與之化矣是以君子必慎其所與
處者焉

立出ゝゝゝ汐ゝゝゝ汐ゝゝゝ秋のそれ

晋山簡ゝゝ時有童兒歌曰山公出
何許往至高陽池日夕倒載歸云ゝ

○宮家

舟奥ゝゝ西屋の秋の夕の郎

○見渡せば紅葉をかりうり
浦の笹家の蜘乃夕ゝそれ

○宝蔵の富貴家

○塔の沢ノ記　畢竹折書上人之岩室

蝙蝠の如くなるもの

○畢竹雲長佛ノ仙人なり

本綱石燕在乳石洞中形似蝙蝠方

食石乳汁冬月采之堪食餘月止可治

病○五雜組云雲陵石燕相傳能飛即風

雨然石質無能飛之理為烈日所暴忽

有驟雨過即衝起往往墜地蓋寒熱相

激而迸落非真能飛也

名月や榊の枝をくゝりつく

塗籠のうゝ流の一様なるゝ中に

ゆゝ類相ゝるよりたゝ江戸濱町

山伏井戸と云不思議ト居の地し

ぬりたゝハ小き蔵し

名月の圓友坊ハ男ゝれ

俳諧ハ笑意。男ハ桂男の

ゝつり圓友房孫老老子ハ対ての句

○猿沼

猿矢立てることゝ人の声を
猿は九くの哭ぬ声をとゝらし
くもの作りうへし
仕合ゐ廻の松の枝ゝ人の月
仕合ゐ八。其許ハすゝきうり
筆の雲支考。名月やせをかゝら
八筆の松蓼太先師
詰此奪胎之法

名月や歌人ゐ歌のあきぐゝと
萬葉ゐ新田ゐの親王勝間田の池ゐ
あをしゐ婦人勝間田の池ゐれる
たちをゐしゐ君ゐ歌のあきと
又袋ゐ一に親王大歌ゐりと
○歌宗祇池ゐ蓮ゐる心ゐ由　素堂
是ゐも見合べし勝間田の池ゐ総一説
大和
○諸の沢ノ紀　胴出ゐり畧

早雲寺名月の雲しやきちり

早雲寺ハ禪宗從北條早雲至氏真
五代菩提所後柏原院永正年中建立
箱根湯本宗徳の墓ゆゑ

○塔乃沢ノ記　藻倉大佛

明月を蘭を切るとり仏頂珠

仏頂珠ハ白毫光し

○りゝ出清の泥足をつゝしき
新まて月ゆゑれぬうつゝ松をおくり

作りて

新月の心をえなうり唐懐箇

三五夜中新月色二千里外故人心　白氏

明月や乃心の名のおもしろ丈

前書あるゝ

○狐・林ノ紅葉

牛まれる葉乃をかゝ杉この如

莊子内篇人間世匠石之齊至櫟社樹
其大蔽牛絜之百圍其高臨山十仞而

後有枝其可以為舟者旁十數觀者
如市云云

○病床に風を取辯ら中
文を本集よりあり是を畧を
○俗言の中
永肖子ゲ東へき言ありさがみの
くもの姫ひとくちるしを
安通姫

○義出　鬼の子

枕草子

○摩竭
名義集第二或伽羅此云鯨魚

○蟾蜍
小出る

○内裏の行き
けぶいく詳なし冥山玉帳
とこぶし無言の小貝ら俗乃月
小き蛇をやこぶしと云ふ名称の作法

○頭〳〵次

鶯鈍や水村山廓酒旗の風

三體詩　江南春千里鶯啼緑映紅水村山廓酒旗風南朝四百八十寺多少樓臺烟雨中　杜牧

○洞玄子

牝石ゑ玉ゑ樹と如来義の卵

○諸ノ沢乃記　夜八泥つく杵の音ゑ

仙源と爲如とゆり。色欲と貪るの意

蜀の源乃ゆり蜀れ業のう〳〵表

蜀の業乃うゝとい〳〵くゝと蜀つき

たると云句作ゆや　業蜀云りけ

ゆる〳〵業書ゆり〳〵

○秋の九井ゑの堰乃かゝとゑん　舟竹

とゝゝゝ土素作〳〵れゆゝ

○人丸の樹の実山の色の栗乃かゝ

ゝゝの切もものあまりゆりと笑

真〳〵ゑゆ

極のかゝる山の木は実ゝ
袋をかけ久夜の長夜刀節信
。能因法師の小袋其中小長柄の
鶴造り時の話屑ゝと節信表収
表ゝ裏ゝ赤情中ゝ裏物を
表ゝ裏ゝ赤情中ゝ裏物を
蛙ゝ侍ゝと云ゝ
蛙ゝ侍ゝと云ゝ
姿のごとくからびたる敢容をつ
ゝ寺ゝ作

○標茅

林間ゝ黄焼する日をもたの色
たゞ赤め志ゝ色ゝ紅ゝ雲ゝぐさ
これ世中ゝ人ゝ界六道一切衆生
林間ゝ焼酒焼紅葉ゝ　白氏
ゝ沼草の黄やきゝゝむ

○冬之部

○十月蟋

ちりくに蘭の巣ふし鳴ゆくぬ

亦詩經七月篇の意

常燈の句解か同し

○況著世樂無有慧心

はと色よと親もの〳〵ぬ火燈ハ

況當作深　法華經譬諭品第三

子と戒しひの意

菊乾の花やつゝむせ美味唱

桃青ワ人二十歌仙庵治助の法

○十月十八日共桃隣出武江而暨義仲寺

望芭蕉翁之墓歎唱ス

上略菊月七日のゆつくよの往ア

義仲寺の家ニよひきまつく空華散

水月うちこはすは心境一茶をひらき

れと万象ふくうはこの方よ

おゝくうつりを利他を利して

終ア真神不滅今を見の人今を

ゆ張へとして

○撫角

はつよかく祈りつゝ富不とけ
桃溪。芭蕉の甥し
其角　嵐雪　枯尾を集
○亡かゝを笠みかゝやや枯尾花　其角
上巻其角発句歌仙。下巻　嵐雪
発句歌仙。終写紀八其角ちり
○蛙を冷くゝ聞くやに
毋ハ歌ハ石花かしおし　撫文
撫石花河を　石花よかしおし

と云うけく書とかすひしる作歌を
撫りて歌を考をとり石花と云

○画賛

畑中子より来静やす撫
静所茶の画る市女笠いるぎたる
板田家よす撫ひの笠着上ハり
志ゝの女ハすに歌客し
○くせ紙菴の芭蕉もいまこういく
しかりもる秋桐の撫の一撫ふとへ

と若こし法へるゆかしとたのもし
○出らし侍りつゝ
流なしとゝむ人なきうしろ髪の音
頓阿此庵集ハ世の中ぞはりかゝぐり
し頃○恩好ぐまとすると
○よひたまへ淑もはしとゝまるの
と当冠ハおきて
○哀もすゞし祢さめのわりはを枕を
涌とでも物よへぐてあれ風 通シ

○哀もうし祢たく命せこハてハ来を
おとさりハたハ志もしゝとひませ 頓阿

雷ハまうさ沢先家の紙波山
一ハ紙波ぶとゝいひ句ハ廉潔紀行
ゑ蕉翁。仙家の雷ハ紫ありと云
ゆり句作り又紫のはくもハ。
はぐも山ゆく天照皇太神宮紫の紙
をもくべ物たちまち海水張て来
ると云ふ琴ハ琴の類也竹

をもて折ふしよりし
昆虫すと蛛つくろひぬこゝの門
貫之土佐日記ゐ小家（コエ）の門乃ちを
くめ縄と竹のり
蓋をさえ吟ぬ草屋ゐこれやは
は旬ハ赤めをやきそをを小屋の
住居のをひしゐ皮ゐ眼をさへ
やうての吟ゐるよ
世中ハとゝもかくてゝもぬへ

宮も草屋をゝてしなゝをハ蟬丸
こゝやはゆくをもかへるもとられてハ
ゝ宮も逢ぬをを坂の関　仝
三一一歩猴銭さし一日の嵐
月の嵐富士の井ゐ或人穴を落入てゝ川ら
に草の根ゐをりをとゞ酒をう白嵐富嵐
来つゝ其根をゝひをめう云ゝ乾ゝ川ら
ゐ沙婆世界ゝ月日のうはりかをうて死
朝をてゝにをきゐとゝを釋氏のいへる不し

追加　多もなく口上もなく粽又把　粽又把

粽又把ばかりとなく貞徳。ちりぬ山ばちのこ

もゆるなのらるゝとひもせぬ春ハ色ぬるチヽキヽス

ヽイラスルの打句。遠ちかよりもまゝ粽あるく

少し見ハこれやなつ嵩ばつかとき沢長嘯子

チヽキコハモテハヤスの打句

句解書成而見請鈍嵐之毫廼頡頏不遑辞之

杜撰夫宥恕云　翠松堂　丹仲威書

撮解嵐雪句集終

さきに晋子乃乙元集ハ

解〻〻今又去冬蜂集

乃解もあるゝ沒古今手

のほ西師のもの実ハ

なるもなを荘毋時ハ荘毋

をなるものハ未なり

○摂解

之百年の浮世解を解
する人あり荘子の誠心を
ときて海内に流布解
せるに宗匠其年新を
序と称す

文化三年丙寅冬十月

蕉門雪門俳諧書籍目録　書林　文刻堂西村源六

蓼太句集　三世雪中庵明和の頃まで の幾句とあつむ　二冊
同　二編　初編にもれたる安永中より の句を集　二冊
同　三編　二編に残る天明七年の句をあつめ　二冊
一夏百歩集　蓼太先生甚中の集 文章幾句あり 面白くなり　一冊
七柏集　雪中庵蓼太著 歌仙 百廿章　四冊
時代変化の俳諧発句の歌仙なり 趣とのべ先生著述あり その中中一の書なり 俳諧を志す人はかならずこれを書べし

雪門七部集　七冊
新蛙引集　附合の秀逸を抜て集 三句のうち 俳句あり 山幸著
去嫌美砂歌　山傘くさの仲と甚奇 妙を奇とす 便利のかた 蓼太著
住吉千句
墨水西岸行　蓼太先生月夜発三先生の 十百韻 附合の発句 多くかた
百羽記　雪門古老の人と偶問 其年の幾句あり
民壁三歌仙　蓼太先生独吟の三の 百韻あり
秋の夜　むさし野紀行 奇仙千句 蓼太著
不玉の歌仙と然翁の 俳あり　完来著

探荷集　雪門言笑秀逸の俳句集なり　初編二編三編四編夷夏蕉之句評　松宮完来評　五編六編　完来評　共七冊

附合小境　蕉太選　小水　一冊
三物の解月花の句　発句のうけを外附合の使ひ方多く故人の流を要しく考へ加へ出で代出を

蕉句小かるみ　蕉太選　小水　一冊
発句の第一方趣向をとること俗語句葉の一助ゆゑ来を出

七部さうし　吏登述　蕉太著　一冊
芭蕉翁七部集の中解らぬ所を門人の問ふまゝにて書き記す七部の側より代出なんハ有へからぐと

三吟赤素紀　芭蕉其角嵐雪三師の哥仙　蕉太著　一冊

鄙廻り紀　宋祇廿五日の解　紀行の抜句　蕉太著　一冊

芭蕉庵再興集　蕉太著　一冊

三素日記　同　猶哥仙有　一冊

紙波紀行　蕉太先生文章発句　嬰兒著　一冊

秋山家　素紅著　歌仙　夜色著　一冊

蕉太附合高點集　三絡著　小水　一冊

蓮華會集　蕉太著　三冊
表合四季　発句　先生五月雨の句程　歴南　詩文章入

雪門報恩集　完来再訂　全　二冊

十三家　附合発句　蕉太述

花ぐもり　正花　蕉花の半代要　同述

棚さがし　月の命　門人雪先生自言　口述　書記俳句　蕉太著

ゆらぬ　蕉太居士俳句の泥　門人哥仙　四世　完来述

吏登句集　二世　中庵　人の句集

亀戸奉納　板廿卒類題集　完来先生評選　当時雪門俳句多邪秀逸の句代数多しくあり

心知り　文毋著　三冊
月菓四季　発句集　雪門　歌仙　巻画入あり

雪のさゝち　阿人著　三冊

惑問珍　吏登著　松侍の問答　蕉太著　哥仙評あり

新起集　附録　雪門名哥哥仙　発句入

吐月句集　附　指遠　匠麦著　二冊
子規亭の発句代多くあり

其角句解　晋子の句一代多くあるを　荘丹著　一冊

三編句の面　完来著　表合　投章入

蕉太文集　完来著　近刻

俳諧書舗

江戸本石町十軒店

西村源六

俳諧名數　懐中本　一冊

俳書ハ漢和付合文章等ニ入用の品天門地理なとの土部より月ゝ七夕の七夕ハ天門の部なり地理ハ佐渡の八景人事ハ年賀の部名釈門ハ忌日の部名宿ハ外ハ俳諧の部なり典曲ハ俳諧を雅楽に投ずる人の部なり

さる歌　紹鷗著　折本　一冊

去来抄歌おもしろき事の一助なり

ちぶり大全　巴甫著　一冊

此書ハ俳諧ハ歌より板行あり俗なれ共俳諧の雅趣なり

毛吹草　七冊

四季発句　季吟著　小本　一冊

春夏外俳書数行なれ共使文章に出ず

○竹山八月補　○雪門春夕　数百句　四冊

●京山象刻取次　水月鏡　千ら

述懐の部なり

○山風雪白集　二冊

西村源六

かゝ内紀行　芭蕉翁著　物人行　一冊

日本国の紀行物人行

つきゝ集　一冊

芭蕉袖双紙　小本　二冊　近刻

蕉一代の付合悉くあり

いろはきれ　冬広坊支元著

四十八字ゝきれ字ゝ俗句

冬広文庫　支元先生の文章

○俳諧御集物　板行仕立

○同清搔　爽帖の類　板行

在庫有ゝ帝ハ出用ゝ依付ゝ

出来揚宜敷ゝ御ゝ求ゝ

3

ガラス使用